自生的ニュータウン　自生的居住地形態の導入によるくらしの創造

奨励賞

西口　雅洋（にしぐち まさひろ）
千葉大学　工学部　都市環境システム学科

自生的ニュータウンは、住人自らが生きるための場・環境・活動をつくり、獲得していく行為を促すニュータウンである。

大量消費生活や住人の減少・高齢化、住居の社会的老朽化、アクティブシニアの活動の活発化などを抱えるニュータウン。今、ニュータウンには新たなくらしの場が求められている。そこで、自生的居住地である千葉県鴨川市太海浜集落での研究から得た「内外部空間の連続性」「公的空間と私的空間の交流」「路地空間の振る舞い」といった空間的知見をいかし、ニュータウンの再構築を行う。住空間の隙間には、周辺農村や都心との繋がりを再び紡ぎ出し、ニュータウン内外の人々が生産的な活動を行う場を挿入する。それらは、ニュータウン人の自生的くらしをつくりだす。

講　評

この作品は、千葉県鴨川市太海浜の調査で得られた知見を、住人の高齢化と減少に悩む神戸市西神ニュータウンの新しいまちづくりの手法として提案している。太海浜の傾斜地に階段状に配置された住居では、比較的オープンな１階（＝公的空間）と小部屋の２階（＝私的空間）が隣接し自然な形で交流が発生していた。この公的・私的空間の配置を、都市の平坦な住居地の中に創り出すために、住居の個室とは一定の隔たりを設けた庭やカフェ（＝余剰空間）として解放し、路地を構成することを提案している。また、軸組を除いて建物の一部を解体したり、半ば強制的に住み替えを促したりして、この余剰空間の創出を画策している面も見られる。

太海浜集落のように、漁民という生活の糧を得る方法や活動時間帯が酷似している集団では目的や話題を共有している。一方、ニュータウンの住人は、働く場所や時間がバラバラなことから、共通の認識を有するためには新たな仕掛けが必要とも思える。ここで提案されたようなまちが実現すれば、私にとっても居心地の良い住み家と思える。兎にも角にも、建築やまちの新しい創り手には頑張ってほしいものである。

（審査委員：古川 洋）